

アイルランド語は呪われているか —ダグラス・ハイド『^{あぶく}泡の破裂』論

河野賢司

I はじめに

アイルランドの西、アラン諸島はイニシマーン島にあるオノフタ小学校の女性教師マギー・サージは、あるビデオのなかで以下のように語っている。

この学校ではすべての授業をアイルランド語で行なっています。ここはアイルランドの学校ですし、この島は日常語としてアイルランド語を話しています。(中略) 歴史や地理、数学また環境問題などについてはすべてアイルランド語で勉強します。(中略) 現代では、アイリッシュダンスをしたり、アイルランド語で歌ったり話したりすることがファッションとなっているのです。ダブリンやゴールウェイなどの都市では子どもたちにアイルランド語だけを学ばせたいという親たちの要望に応じて、特別な学校が作られています。このような学校はいまとても人気があります。とにかく、私が子どもたちに望むことは、特にアイルランド人らしさ、そしてアイルランド語を守ってほしいことです。そして私たち固有の文化を守ってほしいと思います。どの国も独自の文化を持つことが大事ですからね。(1999年8月20日、CS277・旅チャンネルにて放映された番組「妖精の国をたずねて～イエイツ、アイルランドの旅」の日本語字幕より抜粋)

近年の目覚ましい経済躍進によって国民的自信と誇りを取り戻したアイルランド人の間に、いまアイルランド語学習熱が高まっていることを示すこの発言は、ほぼ1世紀前、英語侵略を受けて瀕死の状態にあったこの民族言語の復興を願って精力的に活動したダグラス・ハイドを喜ばせることだろう。

II 著者の略伝

ダグラス・ハイド (Douglas Hyde, 1860-1949) は、1860年1月17日アイルランド教会の牧師の3男として生れ、スライゴウ、のちに(1867年から)はロスコモン州のフレンチパークという、ともにアイルランド語が日常的に残存していた地域で育った。1873年にダブリンの寄宿学校にやられるが、数週間後に^{はしか}麻疹にかかって里帰りしたあ

とはそのまま実家で教育を受けた。14歳から学び始め、日記にも使用したアイルランド語はこの時期のもので、麻疹がハイドの運命を決定したといえるかも知れない。1880年6月にトリニティ大学に入学(志願者100名中、7位の入試成績)を果たし、20歳にして百冊を越えるアイルランド語図書、英語によるアイルランド関連書籍24冊、アイルランド語写本18点を個人的に所有していたという。その後、神学から法学に志望変更して1888年に法学博士の学位を得ているが、1885年には英詩、86年には散文で副学長賞を受けるなど、法律よりも文学や言語への才能や情熱を示した。1892年11月25日に国民文芸協会(National Literary Society)の会長就任演説として行なった有名な「アイルランド国民を非英国化する必要性」(‘The Necessity for De-Anglicising the Irish People’)において、アイルランド語の没落阻止を主張し、英国流儀の安易な模倣を厳しく非難した。創設者ではないが(創設者はマクニールEoin MacNeill)、ゲイリック・リーグの初代会長に1893年に就任、1909年から32年にかけてUCDのアイルランド語教授を務め、1925年からはアイルランド自由国上院議員、そして1938年から45年にアイルランド初代大統領となった。『コナハトの恋歌』(*Love Songs of Connacht*, 1893)、『コナハトの宗教歌』(*The Religious Songs of Connacht*, 1906)が代表的な著作とされる。政治への関与を慎重に回避する姿勢がやがて1915年のゲイリック・リーグ会長職辞任につながり、〈非政治的な理想家〉肌の文人という誤ったイメージが形成されているが、1905年の資金集めのための訪米に見られる愛国的な雄弁はそれを否定するものであるという。しかし、彼の主張の根源的な矛盾——宗派や政治的信条の垣根を越えた、アイルランド語保存の必要性を説きながら、アイルランド語が結局は「国民的アイデンティティ」に他ならないとする場合の「国民」概念の曖昧さ、筆名^{アン・クライブhin・アオイブhin}「美しき小枝」(An Craibhin Aoibhin)で書いた一部の詩にみられる暴力肯定の姿勢——は、依拠する様々な立場の人から利用される結果になったという。「政治」の影響から完全に切り離された「文化」やその振興活動がはたして存在しうるのか、という疑問と合わせて、この点はハイドを論じるときに考慮すべき事柄だと思われるが、拙論ではアイルランド語を主題に据えた彼の戯曲『泡の破裂』を通して、ハイドが推進したアイルランド語復興運動の思想的基盤や限界について考察してみたい。

III 戯曲『泡の破裂』の梗概

1幕の喜劇『泡の破裂』(*Pleusgadh na Bulgóide, or The Bursting of the Bubble*, 1903)の舞台は、学者や教授たちの談笑と憩いの場であるバブル大学の^{コモン・ルーム}教員社交室。テキストの解説によれば、「バブル」「トリニティ」に相当するアイルランド語〈ブル

ゴーチィ) <トリノーチィ)の語尾-oidが類似しており、トリニティ大学がパロディに使われているらしい。登場する学者は、マガフィ (Magaffy)、マク・イー・ドゥーヂィーン (「小さいパイプの息子」の意)、マク・イー・トロール (「奴隷の息子」の意)、マク・イー・トリール、マク・イー・イン、マク・ハトキン (Dr. Mac Hatkin) の6人。

冒頭、この教員社交室コモン・ルームにおける、マガフィ教授のアイルランド語糾弾の暴論から芝居は始まる。彼によれば、アイルランド語は千年前には存在したかもしれないが、現在すでに死語であり、それを中等教育に導入しているのは詐欺行為である。なぜなら、音韻は汚く、文法もなく、表現力も貧弱で下品なこの言語を国民の税金を使って教えるのは不合理だからである。現行のアイルランド語試験の出題委員に今年はロシア人を採用したが、採点基準が甘くなりつつあるから、来年は(知人のギリシア国王推薦の)モンゴル人学者の起用を検討中という (Native Speakerであるはずのアイルランド人排除の姿勢が顕著な台詞である)。この語学試験に出題されたのは、「桶のなかにバターミルクが残っていた」という文をアイルランド語に訳せ、というもので、問題文としては荒唐無稽だとマガフィは指摘する。(しかし、同僚教授からそのギリシャ語訳は如何、と問われて、専門の彼は返事に窮してしまう。)とにかく、アイルランド語は「まったくもって下品で、猥褻で不愉快」で、「理性的な会話」を営むのは不可能だと断言し、ポケットに持っていたその問題用紙をくしゃくしゃに丸めて窓から投げ捨てる。

ところが戸外でその問題用紙を拾い上げた老婆がいきなり教員社交室コモン・ルームに押し入ってくる。教授連はこの闖入者を当然追い払おうとするが、老婆は彼らに対して、彼らがこの世で一番忌み嫌っているものが襲いかかるように、との呪いをかけて悠然と立ち去る。その直後、信じがたい事態が発生する。「老婆は行ってしまった」というマガフィの台詞を皮切りに、教授たちの口から発せられるそれ以後の言葉は、当人は英語を喋っているつもりでも、すべてアイルランド語に自動変換されてしまうのだ。

混乱状態パニックにある教授陣のもとへ、マク・イー・フィン教授の妻が登場し、アイルランド総督夫妻が到着し、学内視察を所望との一報を伝える。夫は事情を必死に説明するが、アイルランド語の台詞は妻にはもちろん理解できず、一同、夫人を取り囲み、口を指さし頭を横に振って「英語だめ」とアイルランド語で叫ぶが、夫人には到底通じない。いつまでも総督夫妻を階下で待たせておくわけにもいかず、接待役を誰が務めるかで、お互いに押しつけ合いをするうちに、とうとう総督夫妻一行が入室し、まずマガフィ教授に話しかける。マガフィの返事は当然アイルランド語となり、総督はこれを彼の専門のギリシャ語による高邁な挨拶と解釈し、次にマク・イー・トリールに話しかけるが、彼の返事も理解できず、当惑する。総督夫人は、ダブリンの街に

不案内なイギリス人御者が、大学ではなく間違っ^て精神病院に馬車を到着させたのに違いない、と推測する。そこへ、^{コモン・ルーム}教員社交室に居合わせず呪いの難を逃れた言語学者マク・ハトキン教授が姿を見せ、総督は彼に通訳を依頼する。アイルランド語の権威を自称していたハトキンだが、同僚の話すアイルランド語を聞いて最初は、これはそもそも言語ではない、暑さで気が触れたせい、と断言、次には日本語の音節がいくつ含まれているが日本語でもない、と言う。呪いをかけられた教授たちが「嘘つき！」とハトキンを一斉に非難するとようやく、アイルランド語だと悟る始末。総督は、彼らがなぜ、反逆罪に匹敵するアイルランド語でのみの返答を繰り返すのか、その理由をハトキンに尋ねさせるが、ハトキンの知悉するアイルランド語は古い時代のアイルランド語であり、近代アイルランド語を話す教授たちとは意思の疎通ができない。しかしながら、言語学者の面子にかけても分からないとは言えないハトキンは、〈暑さの余り英語が喋れなくなったが、物珍しさに免じてご勘弁願いたい〉とか、〈最近、彼らはアイルランド語文献を読み過ぎて、その美しさに感銘を受けたせい〉などと、でたらめの通訳をする。総督夫妻やイギリス国王に対する侮辱的意図はないのだな、と総督が念を押すと、マガフィは片膝をついて土下座し、片手を胸に当てて「忠実です」と繰り返すが、意味不明の言葉の連呼に、総督はかえって立腹する。マガフィはいっそう情熱的にイギリスへの忠誠の台詞を吐露するものの、相変わらず嘘の通訳を続けるハトキンの姿に、教授たちの憤怒は次第に募り、彼らはハトキンに向かって威嚇的に詰め寄る。総督夫人は教授たちの目に異様な憎悪と悪意を読みとって怯え、ハトキンも身の危険を察知して夫人の背後に隠れる。事態ここにいたって総督も彼らの言動を反逆行為とみなし、一行は部屋から慌てて退散する。残された教授たちは、大学を追放されるに違いないこれから先の不幸を嘆く。あとすこしで大学総長になれるところだったのに、とマガフィは繰り返言を言い、他の教授も同様に絶望の台詞を漏らす。

そこへ再び、さきほどの老婆が現れ、愛国心を疎外するバブル大学での教育の弊害を諷々と説き、ようやく呪いを解いて立ち去っていく。「老婆は行ってしまった」というマガフィの台詞から、再びもとの英語に戻り、マガフィは事情説明に総督の後を追おうとするが、弁解はもう手遅れだよ、と同僚たちから止められる。「泡は破裂してしまっ^たのか」と気絶しかかったマガフィを同僚が抱きかかえて、幕。

IV 実在した戯画モデル

この劇の登場人物で、実在した人物のパロディであろうと特定できるのは、マガフィとハトキンの2人である。マガフィはマハフィ (Sir John Pentland Mahaffy, 1839

-1919), ハトキンはアトキンソン (Robert Atkinson, 1839-1908) で、ともにトリニティ・カレッジの教授である。つまり、還暦を過ぎた2人の国立大学現職教授を、その大学の卒業生で、現在40過ぎの在野の愛国的民俗学者ハイドが辛辣に風刺した劇作品という側面がある。

経歴²⁾を調べると、マハフィは、アイルランド人の両親のもとスイスで生れ、9歳からドネゴールで家庭教育を受け、1855年、16歳でトリニティ・カレッジ入学。古典語に精通し、25歳(1864年)で特別研究員(フェロウ)となり、以後55年の長きにわたって同大学に奉職。1869—99年の30年間は古代史の教授で、古代ギリシャの社会生活と文明に関する著作を多数執筆し、エジプトで発見されたパピルス文書の解読も任せられ、1895年には『プトレマイオス王家の帝国』(*The Empire of the Ptolemies*)を上梓。1911—16年はRIAの会長。1918年には叙勲。(牧師であったから、厳密にはこの叙勲は違法とされる。)アイルランド語による文学を否定し、ナショナリズムをプロヴィンシャルイズムと同一視した。しかしながら、1917年にトリニティ・カレッジで開催されたIrish Convention(代表者会議)においては、アイルランドはスイスをモデルにして、アルスターを自治州とする連邦制をとるべきだ主張した。ハイドの戯曲の結末で暗示される悲劇とは違い、教授職を解任されることはなかったばかりか、悲願の学長就任を1914年の75歳のときに果たし、1919年学長邸で死去している。

本論から若干逸れるが、興味深いのは、このマハフィ教授はオスカー・ワイルドの入学当初からの指導教官であり、自分の学生時代よりも優秀な学生と判断したマハフィは、オックスフォード進学をワイルドに勧めたという。マハフィ著『ギリシアの社会生活』(*Social Life in Greece*, 1874)の序文には、オ大在学中のワイルドの協力に対する謝辞が寄せられているほどである。TCD卒業後もワイルドはこのマハフィ教授と1875年6月にイタリアを、77年の3—4月にイタリアとギリシャ旅行をしている。とくに後者の旅は長引いて、オ大の新学期開講に間に合わず、停学処分を受けている。後年、ワイルドはマハフィ著『ギリシアの生活と思想』にいくぶん辛口の書評を書き、一方、マハフィの方も、ワイルドの同性愛裁判後、早期釈放の嘆願書にも署名しなかったという。

また、ジョージ・ムアは、マハフィを「のっぼの桃豚」('a long pink pig')になぞらえている。³⁾

一方のアトキンソンは、サンスクリット語とロマンス語の教授であり、劇中で彼が古代・中世アイルランド語は話せても現代アイルランド語は理解できないという文脈に合致する。詳細な経歴は不詳だが、ハイドは自分の初めての著作*Leabhar Sgéaluigh-eachta* (Dublin, 1889) 34部を知人や新聞社等に贈呈しているが、その送本リストの15

番目にAtkinsonの名前があり、⁴⁾劇の中では盛んにからかっているが、少なくとも89年当時はある程度の敬意をその人柄や学識に抱いていたのでは、と推測される。(ちなみにこのリストにマハフィー教授の名前はない。)

V アイルランド語教育の問題点

世紀転換期のアイルランドでは、ゲイリック・リーグなどの運動によって、アイルランド語教育の分野では3つの進歩があったとされる。それは、①ハイドの尽力によって、1900年に中等教育におけるアイルランド語の地位が大幅に改善されたこと、②1904年に、ゲールタハト（アイルランド語使用地域）での初等教育におけるバイリンガル方針が受認されたこと、③国立大学入学試験の必須科目となったこと、を挙げ、とくにこの最後の3番目がアイルランド語推進において最も効果的だったとしている。⁵⁾

こうした動きに敵対して、中等教育におけるアイルランド語教育にもっとも強く反対の姿勢を示したのが、前章で紹介したマハフィーであり、1899年2月に彼は中等教育審議会において、アイルランド語教育への反対演説を行っている。以下に訳出引用するのは、ゲイリック・リーグにおける1900年ごろの陳述⁶⁾で、ケルト語（アイルランド語）が言語学観点からみて興味ある研究対象であり、試験科目の一つとみなすことは認めながらも、教育上の価値は皆無であると断言している点が注目に値する。(ゲイリック・リーグの議長ともあろう人物が、妙に腰の引けた低姿勢で、マハフィー教授のご機嫌取りのような、情けない誘導尋問を行っている印象を与える点にも注目したい。)

議長 あなたのご意見では、ケルト語を生きた言語と見なすとして、これに教育的な価値はあると考えますか？

マハフィー 皆無です。私はこの本において専門家諸氏から確証を得ておりますが、そのうちの一人は、現在使用されている複数ないし、ある特定の教科書について、馬鹿げている、もしくは下品であるという理由で、批判をしています。アイルランド語のこのうえない権威筋から伺った話では、宗教色のないアイルランド語教科書、あるいはさきほど述べた反対理由(馬鹿げている、もしくは下品である)のいずれにも該当しないような教科書を入手することは不可能とのこと。もう一人の専門家はRIAの講師のグイン氏です。中等教育制度における20年間の学習は、実際には、わが国でのアイルランド語の知識を縮小させ、20年前よりも現在のほうがアイルランド語の知識は少ない、と氏は述べております。

議長 きちんと学習されるのであれば、私としては学習科目としてのアイルランド語の価値を過少

に評価するつもりはまったくありませんが、あなたのご意見では、その唯一の真の学習価値は、ドイツの一部の大学で教えられているような、言語学的意味におけるものでしょうか？

マハフィ アイルランド語は、西部の地方で鮭釣りや雷鳥狩りをする人間には役に立つこともあります。2つ3つ単語を知っていると大変に重宝であることを私はしばしば経験しました。

議長 しかし、時間が大切な生徒たち、生活条件のせいで子弟の教育に十分な時間を親たちが割いてやることができず、[学校での]一瞬一瞬の時間が貴重である生徒たち、その彼らが真剣に履修する科目としては、ケルト語は登録されるべき科目であるとお考えにはならないのですね？

マハフィ 時間の有害な浪費であると考えます。

僅かにこれだけのやりとりの資料から論評するのは困難であるが、マハフィ教授によるアイルランド語教育批判の論拠は大雑把に言って3点であり、①読み物としてのテキスト原文の内容の不適切性、②20年前との比較における教育効果の低さ、③他の履修科目との時間的均衡の問題、と要約できるだろう。

ハイド劇『泡の破裂』に即して言えば、①の指摘は、「桶のなかにバターミルクが残っていた」をアイルランド語に訳せ、という出題例がそれに当たる。しかしながら、農村の日常生活の香りのするこの設問の妥当性の議論はさておき、少なくともこの出題は、この文章をはじめとして他のどのような文章であれ、翻訳可能な語彙や対応する文法が現代アイルランド語に備わっていることを示している。(死語と思われがちなアイルランド語が受ける誤解の一つは、現代社会の内容を表現できないという、いわれなき誤解である。)もし、現代の都会生活と無縁な文物や風習を「馬鹿げている」と考えるのであれば、マハフィ教授自身が専攻する古代史の研究こそ、夏炉冬扇の役立たずであろうし、現代の日本人が古典の『枕草子』や『源氏物語』を古文で味わうのも「馬鹿げている」作業に他ならないことになる。⁷⁾

②の教育効果の低さの問題は、費用対効果の観点からしばしば耳にする批判であるが、むしろ教育方法論や動機づけに関わる別の次元の課題であり、その様々な要因こそを調査して有効な解決策を探らねばならないだろう。教育効果が上がらないからカリキュラムから外すというのは、言語教育の本質や意義をまったく考えていない暴論である。ハイドらの尽力以来1世紀が経過したこんにち、なぜアイルランドがアイルランド語国家として復興できていないのかは、教育方法の技術的要因よりも制度的あるいは社会的要因が大きいであろう。アイルランド憲法⁸⁾に第1公用語と明記されながらも、第2公用語の処遇に近い実態が事実上は続いているのは、第8条3項の例外規定によって、第1公用語宣言そのものがいわばザル法になっているからであろう。

③は、受験科目の設定の問題で、わが国でもたびたび論議を呼ぶ事柄である。受験

科目数減少が、受験者の負担減にはかならずしも直結しないし、かえって総合的な学力低下の弊害が指摘されることもある。アイルランド語学習は時間の無駄、とは手厳しいが、無駄か否かを測る尺度をどこに求めるかは、見解の相違にすぎないだろう。

VI アイルランド語は呪われているか

さて、ハイドの『泡の破裂』で扱われている主題は、唾棄すべき忌まわしい言語と見做されてきたアイルランド語、いわば〈呪われた言語〉としてのアイルランド語の問題である。劇のなかでは、この劣等のレッテルを逆手にとり、この言語を〈呪詛手段⁹⁾〉として権力に一矢報いるわけであるが、この展開の是非も含めて、『泡の破裂』には言語とその使用に関する思想をめぐる問題点がいくつか潜んでいる。

まず第1に、英訳版の文体の点で注目したいのは、マガフィ教授の喋る英語の綴り字の極端な乱れとその意味である。[s]音、あるいは[d]や[z]音までがほとんど[th]音で代用されているのが大きな特徴であるが、彼のアイルランド語の発音癖がそのまま英語発音に顕在化したことを示すものであり、アイルランド語を蔑視するマガフィその人の身体（発声器官）のなかに、アイルランド語が宿っているという矛盾が明らかになる。この点は（すくなくとも、表記からみる限りでは）標準発音の英語を話す他の教授たちとは一線を画している。マガフィのアイルランド訛は、すでにIV章「実在した戯画モデル」で見たように、マガフィのモデルとされるマハフィ教授がアイルランド人の両親を持ち、9歳からは北西部のドネゴール州で育ったことと大いに関係する。つまり本来であれば、マハフィもハイド同様に熱心なアイルランド語擁護者となってもおかしくない言語環境に育っていることは示唆的である。さらに言えば、スイスという、こんにち多言語公用語社会として知られる地域——1840年代のスイスの具体的な言語状況は調査を必要とするが——での生活体験は、複眼的な言語観や多様な価値観をマハフィのうちに培っても不思議ではなかったはずである。いずれにしても、アイルランド語を嘲笑・愚弄する役回りがよそ者の英国人登場人物であるならば話は分かりやすいが、アイルランド人のマハフィが英語による言語帝国主義のお先棒を担ぎ、しかも自らの出自の証しとなるアイルランド語発音の痕跡を露わにとどめている姿は滑稽極まりない。

だが、イギリスの政治・文化的権力の牙城であるトリニティ大学に奉職すること自体が、こうした変節を余儀なくさせる側面があったことも指摘せねばならない。ハイドがアイルランド語教授として勤務したUCDと違い、1591年設立のトリニティ大学はもともとプロテスタントの支配者養成機関の機能を果たしており、男子カトリック学

生の入学が許可されたのは1793年（女子学生の入学許可は1903年）であり、被支配者言語であるアイルランド語講座の設置はかなり遅い時期まで放置された。なぜなら、「ダブリン大学 [=トリニティ大学] の方は1592年エリザベス女王より下付された特許状に基づいて設立されており、その体制は今日に至るまでほとんど変わっていない。英国王室の信仰を反映して新教主義を守り、19世紀になるまでカトリック教徒をフェロー（研究員）に加えようとはしなかった。また教育の姿勢も、国内に眼を向けるよりも、イギリスとヨーロッパ、特にギリシア・ローマの古典に中心を置いており、制度上もオクスフォード大学やケンブリッジ大学とは密接な関係にある¹⁰⁾」とされる大学だからである。つまり、トリニティ大学でアイルランド語や文化を学ぶことは、いわば敵の牙城に乗り込んで闘う異端的な営みを意味し、ハイド以外の誰もが容易にできる行動ではなく、トリニティ大学は本質的にはイギリスの大学であった。イギリスの体制側に取り込まれたマハフィが、自己の属する権力者集団の利益を弁護し、アイルランド語を批判するのはその意味では当然至極な行為であり、議論されるべきは、そうしたイデオロギー対立を越えた次元でなされるべき、民族言語教育のあり方であろう。

もしかすると、後世の我々はいささかの偏見を抱いて、マハフィとその反アイルランド語観を否定的にとらえる傾向があるのかも知れない。『ハイド劇選集』の解説の一節がそのことをはからずも教えてくれる。解説によれば、グレゴリー夫人の『我らがアイルランド演劇』(*Our Irish Theatre*, 1913)のなかに、マハフィが5ポンドの寄付金とともに添えたイエイツ宛てのメモへの言及があり、「アイルランド語は、アイルランドの舞台上で歌われるイタリア歌曲と同様に、アイルランド人には理解されない」という趣旨の件りがそのメモにはあるという。だが、実際にグレゴリー夫人の原文にあたってみると、マハフィの文面のニュアンスは決してそれほど否定的ではない。マハフィの書いたとされる言葉は、「あなた方の計画に思い切って5ポンドを拠出し、アイルランド語による演劇上演を今後も期待します。わが国の舞台上でよく耳にするイタリア語と同じ程度にアイルランド語は国民に理解されることでしょう¹¹⁾」である。劇作家トマス・マーフィ (Thomas Murphy, 1935-) の『ジューリ・コンサート』(*The Gigli Concert*, 1983) や、オペラ歌手マコーマック (John McCormack, 1884-1945) などの世界的活躍を思えば、アイルランド人のイタリア歌曲への愛好には根強いものがあり、イタリア歌曲を引き合いに出すマハフィの比較は決して単なる揶揄とは言えないように思われる。すくなくとも、『ハイド劇選集』解説者の引用には、故意か否かはさておき、解釈上の不備があると言わねばならない。

第2に、劇のプロットに関して筆者のもっとも気にかかるのは、アイルランド語を

喋ることが、一種の懲罰として課せられている点である。アイルランド語が美しい言語であるというハイドの持論に立てば、その使用能力は本来ならば、天賦の恩恵として受け止められねばならないはずで、懲罰の道具としてアイルランド語を課す筋立ては、筆者には逆差別的な印象を与える。もちろん、ハイドが意図していたのは、アイルランド人が被った母語殲滅の歴史との類推であろう。英語を話したいのに、どんなにあがいてもアイルランド語しか話せない異常な状況下に教授たちは置かれる。生来の母語を奪われるだけでなく、異なる言語をいやおうなしに話さねばならない精神的苦痛を教授たちに初めて身をもって味わせることで、アイルランド語を奪われ英語を強制されてきたアイルランド人の歴史的報復を果たす狙いがここにはあるのだろう。だが、苦勞して英語を習得した19世紀のアイリッシュと違って、バブル大学の教授たちの場合は、なんの苦勞もなく、アイルランド語が滔々と口からほとぼり出ている。外国語を喋るときに味わうもどかしさや苦痛が、彼らにはあらかじめすっかり免除されているのは、偏務的な復讐と呼べないだろうか。

これと関連して筆者にとって看過できないのは、ハイドの言語観に潜む言語選民思想である。ハイドは繰り返し、アイルランド語は美しく豊かであるから守らねばならない、と主張する。では、美しくも豊かでもない言語——仮にそういうものがあるとして——は守らなくともよいのだろうか？ そもそも、美しくも豊かでもない言語など存在するのだろうか？ いかなる言語にせよ、その話し手にとって、表現手段としての自らの言語は、生活様式=文化そのものであり、〈言語にとって美とはなにか〉といった哲学的命題を越えて、その個人の体現する生き方そのものであるはずである。

このような青臭い原則論を筆者があえて持ち出すのは、アイルランド語はまぎれもない印欧語族（アーリア語族）の一つであり、〈バスク語やマジヤール（ハンガリー）語とは違って〉、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語と対等の関係にあるという点にこそ、アイルランド語の優秀性の御墨付きを求めているように受け取れる箇所がハイドの評論の一節にあるからである。無理に揚げ足をとれば、〈バスク語やマジヤール語〉なら滅びても構わないのか、古典語に匹敵するような地位を持たぬこれらの言語は、美しくも豊かでもないのか、と聞き返したくなる。ハイドの主張するように、アイルランド語が美しい言語であることには筆者はなんの異論はないけれども、〈すべての言語はそれなりに美しい〉というのが真理ではないだろうか。ハイドの一幕劇『泡の破裂』は、抑圧された民族の言語を蔑視する変節漢・売国奴の知的エリート集団を諧謔的に描いた作品として十分に娯楽性を備えた喜劇であるが、こうした問題点を突き詰めて考えていくならば、決して手放して賞賛できない歪みが内在することにも気づかされる。

使用テキスト

Selected Plays of Douglas Hyde: Irish Drama Selections 7 (Gerrards Cross, Bucks: Colin Smythe, 1991)

注

- 1) 近年よく耳にする経済用語〈バブル崩壊〉の語源と目されるのは、1711年創立の南海会社 (South Sea Company) の株価が10倍に跳ね上がり、やがて急落した1720年の「南海泡沫事件」(South Sea Bubble), およびそのフランス版ともいえる「ミシシッピ泡沫事件」(Mississippi Bubble) である。この Compagnie de la Louisiane ou d'Occident (1717年創立) の株価も40倍の高値に膨れ上がったが、やはり1720年に暴落した。ハイドの戯曲での〈バブル崩壊〉は、〈バブル大学の解体〉と重ね合わせ、名門大学の教授たちの地位や身分、ひいては彼らの研究や教育活動が、泡のようににはかなく実体のないものだったことを示唆している。
- 2) Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography, Third Edition* (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), p. 265.
- 3) イエイツのスーザン (Susan Mary Yeats) 宛ての1901年6月28日付書簡の末尾。John Kelly & Ronald Schuchard (eds.), *The Collected Letters of W.B. Yeats, Volume Three 1901-1904* (Oxford: Clarendon Press, 1994), p.85.
- 4) Dominic Daly, *The Young Douglas Hyde: The Dawn of the Irish Revolution and Renaissance 1874-1893* (Dublin: Irish University Press, 1974), p.103.
- 5) Brian O Cuiv, *A View of the Irish Language* (Dublin: The Stationery Office, 1969), p.99.
- 6) Tony Crowley, *The Politics of Language in Ireland 1366-1922* (London: Routledge, 2000), pp.194-5.
- 7) アイルランド人にとってのアイルランド語教育の問題は、ある意味でわれわれ日本人の「古文」「漢文」の教育の位置づけに似ている面がある。数百年前に先祖が使用していた言葉であり、なんとなく分かる気はするのだが、厳密な意味や文法はきちんと教わらないと理解できない、という意味において。ただし、われわれにとって現代日本語の基礎をなす「古文」と違い、19世紀後半以降、母語が英語に転換してしまった現代の多くのアイルランド人にとっては、アイルランド語は英語とは本質的に異なる別の言語(内なる外国語)であることは根本的な差異である。
- 8) 公用語に関するアイルランド憲法の規定の原文は以下の通り。

Article 8.

1. The Irish language as the national language is the first official language.
2. The English language is recognised as a second official language.
3. Provision may, however, be made by law for the exclusive use of either of the said languages for any one or more official purposes, either throughout the State or in any part thereof.

[J. Anthony Foley and Stephen Lalor (eds.) *Gill & Macmillan Annotated Constitution of Ireland 1937-1994* (Dublin: Gill & Macmillan, 1995), p.32.

半世紀ほど前の古い翻訳ではあるが、日本政府の公式訳は以下の通り。

第八条

- 1 国語であるアイルランド語は、第一順位の公用語とする。
- 2 英語は、第二順位の公用語として承認する。
- 3 前二項の規定にかかわらず、全国を通じ、又は一地方において、一又は二以上の公の目的に関し、こ

これらの言語の一を専用語とする旨を法律で定めることができる。[衆議院法制局・参議院法制局・国立国会図書館調査立法考査局・内閣法制局『和訳各国憲法集(続)(一)アイルランド憲法』, 1957年, pp. 7-8.]

- 9) ハイド劇では、言葉による呪い、詩人の呪いという主題が頻出し、ことばのもつ呪術的な力への畏怖が表現されることが多い。例えば、専門劇場における組織だった上演としては初のアイルランド語劇として一般に知られる『縄縋い(キャサンツーガン)』(*Casadh an tSúgáin*, 英訳では*The Twisting of the Rope*, 1901年10月21日初演)では、婚約者のいる娘を甘い言葉でかどわかす吟遊詩人ハンラハン(初演ではハイド自らが演じた)に対して、母親を含む周囲の者たちがなんの叱責も注意もできないのは、樹木を引き裂き、岩を砕き、蒔いた種を腐らせ、乳牛の乳を枯渇させるような超自然的な呪いの力が、この詩人の言葉には宿っていると村人たちが信じているからである。『結婚』(*The Marriage*)に登場する盲目のフィドラーのラフタリーの場合も、多くの人が手土産持参で押し寄せるほどの魅力が、その歌声や歌詞に込められているし、鑄掛屋のキスを心得て長年の呪いが解け、醜い老婆の姿から美しい女性に変身する『鑄掛屋と妖精』(*The Tinker and the Sheeog*)の妖精も、仲間の妖精たちの歌う歌声に説き伏せられて、またもとの場所へと戻ってしまう。

ちなみに、ハイド以後にアイルランド語による劇『人質』(*An Giall*, 1958)を書いたブレンダン・ビーアン(Brendan Behan, 1923-64)の代表作『けったいな奴』(*The Quare Fellow*, 1954)の標題は執筆当初は『別の縄縋い』(*The Twisting of Another Rope*)であり、ここでの縄は死刑囚を縛り首として処刑する縄であるが、ハイドの『縄縋い(キャサンツーガン)』を意識している。なお、『縄縋い(キャサンツーガン)』の2か月前(1901年8月)にマクギンリー(P.T. McGinley)の*Eilis agus an Bhean Déirce*というアイルランド語の芝居がダブリンで上演されているという。[Robert Welch (ed.), *The Oxford Companion to Irish Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1996), p.86.]

- 10) 水之江有一『アイルランド一緑の国土と文学』, 研究社, 1994年, p.12.
 11) Lady Gregory, *Our Irish Theatre* (London: G.P.Putnam's Sons, 1913), p.15.